

9 高度進行胃癌，特に4型胃癌の腹膜播種（P）を主な標的とした staging laparoscopy (SL) の意義

藪崎 裕・梨本 篤・田中 乙雄

新潟県立がんセンター新潟病院外科

【目的】胃癌におけるP1の治療成績は不良である。Pを正確に診断し、無益な単開腹を避けることを目的としてSLを施行してきたので、その臨床的意義について検討した。

【対象と方法】2003年3月までに術前診断P0の進行胃癌に対しSLを施行した70例を対象とした。細胞診はPapanicolaou染色にて判定し、免疫染色をCEA 62例，MOC-31 40例，PCR法を21例に併用した。

【成績】

1. 背景は男性43例，平均年齢62.0（33～83）歳。肉眼型は2/3/4型16/14/40例。細胞診はP0CY1/P1 19/17例。
2. CY1 36例の陽性率はCEA 76.7%，MOC-31 96.2%，PCR 53.3%。
3. SL後の治療は開腹59例（NAC 10例），非開腹11例（4型10例）。
4. 開腹59例中，非切除は1例のみで切除率98.3%。
5. 切除58例中，非治癒切除は25例（4型19例），治癒切除率56.9%。
6. 2000年までの34例とそれ以降の36例を比較すると，非開腹が1例から10例に，切除率が97.0%から100%に増加した。

【結語】SLは従来の画像診断では不可能な術前Pの評価が可能であり，高度進行胃癌に対する治療方針決定のための補助診断として低浸襲で有用な手段である。今後は4型胃癌を中心にSLでP1と診断され，通過障害を認めない症例に対しては，手術を回避する方針である。

10 胃癌における総肝動脈幹・脾動脈幹リンパ節転移陽性例の検討

藍澤喜久雄・奥村 直樹・森岡 伸浩

清水 英利・宮下 薫

燕労災病院外科

胃癌におけるNo. 8a, No. 11p リンパ節転移例の臨床病理学的検討を行った。D2以上の郭清・切除を行った胃癌752例中，No. 8a, No. 11p 転移例はそれぞれ110例（15.2%），45例（6.2%）であった。No. 8a 転移例は中下部胃癌で多く，単独転移例も3例（2.7%）認められた。No. 11p 転移例は，上部胃癌，T2以上が中心で，胃全摘例における転移例が多かった。N2例における転移率はNo. 8a；52.7%，No. 11p；17.1%で，5年生存率はそれぞれ46.5%，11.1%と，No. 8a 転移例の予後は比較的良好であったが，No. 11p 転移例の予後は不良であった。術後合併症発生率は脾臓/脾合併切除を行った胃全摘例で高かった。以上より，No. 8a 転移は高率で，単独転移例もみられ，標準D2郭清としてNo. 8a 郭清は必須であり，郭清効果も大きい。No. 11p 転移例に対しては，さらに郭清精度を高める必要があるが，合併症を考慮すると，胃全摘におけるNo. 11p 郭清では脾臓温存術式が望まれる。

11 膵頭十二指腸切除術を施行した胃癌症例の検討

渡辺 直純・梨本 篤・藪崎 裕

瀧井 康公・土屋 嘉昭・田中 乙雄

新潟県立がんセンター新潟病院外科

【目的・方法】胃癌に対する膵頭十二指腸切除術（以下PD）の適応と意義を明確化するため，PDを施行した胃癌33例中，他癌合併6例を除いた27例を対象に臨床病理学的事項につき検討した。

【成績】性別は男：女＝12：15，平均年齢は60歳（39～75歳），占拠部位はL：25例，LMU：2例，腫瘍最大径の平均は8.1cm。PD施行理由は術中判定で原発巣，及びリンパ節転移巣よりの膵直接浸潤が24例，十二指腸浸潤単独例が3例で